# 自閉スペクトラム症児の自己鏡映像に対する反応

上條　淳夏

自閉スペクトラム症（ASD）児は、自己意識の発達に問題があると考えられている（Lyons & Fitzgerald, 2013）。本研究は、ASD 児と定型発達（TD）児を対象とし、自己意識の一側面である自己鏡映像認知について検討した。自己鏡映像認知とは、鏡に映った自分の姿を自己であると認識することである（板倉，1999）。自己鏡映像認知の成立は、マークテストや名前課題（自己像を見て、自分の名前や 1 人称を言う課題）によって調べることができる。遅延なく表示される自己鏡映像（ライブ自己鏡映像）と 2 秒遅延して表示される自己鏡映像（遅延自己鏡映像）のマークテスト通過率を比較した先行研究（Miyazaki & Hiraki, 2006）から、3 歳の TD 児は、自己像が自分の動きと時差なく随伴すること（同時的随伴性）を手がかりとして自己鏡映像認知を行っていると考えられる。一方で、ASD 児が同時的随伴性を手がかりとして自己鏡映像認知を行っているかについては、一致した見解が得られていない。本研究は、自己鏡映像認知の際に ASD 児がどのような情報を手がかりとしているかについて検討することを目的とした。

分析対象となったのは、就学前の ASD 児 13 名（平均生活年齢 53.31 ヶ月；13 名中 12 名の平均発達年齢 26.86 ヶ月）、および対照群として研究に参加した TD 児 11 名（平均生活年齢 23.27 ヶ月）であった。対象児全員に対して、ライブ自己鏡映像を提示する試行と 2 秒の遅延自己鏡映像を提示する試行の 2 試行を行った。各試行の開始前に、児に気づかれないようにして、実験者が児の前髪付近にマーク（キャラクターのシール）を添付した。マークの付いた自己像を見て、マークに触る、もしくはマークを取った児は、マークテストに通過したと判断された。また、「これだあれ？」「これだれか教えて」という実験者の教示に対し、自分の名前もしくは 1 人称を答えることのできた児は、名前課題に通過したと判断された。

13 名中 10 名の ASD 児と 11 名中 3 名の TD 児が、2 試行中 1 試行以上においてマークテストに通過した。ASD 群の平均生活年齢は TD 群の 2 倍以上高く、ASD 群は TD 群よりも自己鏡映像の性質の学習経験が多かった可能性がある。ASD 群の方が自己鏡映像の性質の学習が進んでいたため、ASD 群のマークテスト通過率は TD 群よりも高かったのかもしれない。また、ライブ自己鏡映像と遅延自己鏡映像との間で、ASD 群のマークテスト通過率に有意な差が確認されなかったことから、自己鏡映像の提示条件による同時的随伴性の有無は、ASD 児の自己鏡映像認知に影響を与えていなかったと考えられる。一方で、遅延自己鏡映像を見始めてから 2 秒以内にマークテストに通過した ASD 児が 2 名いた。2 秒の遅延自己鏡映像を見始めてから 2 秒以内では、自分の動きの視覚的フィードバックを検出することができない。この 2 名の ASD 児は、遅延自己鏡映像を見始めた瞬間から検出可能である自己の視覚的情報（顔や衣服など）を手がかりとし、自己像を自分であると判断した可能性が示唆された。

TD 群の名前課題の通過率は、マークテストと同程度であった。一方で、ASD 群の名前課題の通過率は、マークテストよりも有意に低かった。ASD 群において課題間の通過率に差が生じた理由には、言語発達の遅れという ASD の特性が関係していると考えられる。名前課題に通過するためには自分の名前の発話が必要であるのに対し、マークテストには発話をせずとも通過することができる。名前課題に非通過だった ASD 児は、自分の名前を聞かれても答えることができないため、周囲の養育者から自己意識が発達していないと思われる可能性がある。しかし、名前課題に非通過だった 10 名の ASD 児のうち 7 名は、マークテストには通過することができた。以上の結果から、自己像を見て自分の名前を答えるという名前課題に通過することができなくても、自己意識の一側面である自己鏡映像認知は成立している ASD 児の存在が明らかになった。（比較発達心理学）